本格派魔法学園！！ファトシュレーン～ぱーと３～

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本格派魔法学園！！ファトシュレーン～ぱーと３～

【Ｎコード】
Ｎ５７３２Ｄ

【作者名】
新城寺ハヤト

【あらすじ】
セシルはファトシュレーンに通う生徒。貧乏な家にお金を入れるため、ファトシュレーンに入学した。努力の甲斐あって数年のうちに大魔道士になったものの、なかなか高等魔法を教えてくれない学校に嫌気がさしていた。そんな矢先に事件が起きた。学校の数キロ先に謎のエネルギーが降り注ぎ、街の近辺にみたこともない魔物達が次々と現れた。学校はそれを鎮圧。しかし、騒動はこれで終わらなかった。魔物を倒しながら仲間達と日々修行に明け暮れながら、順調にレベルアップしていくセシル。そこに新たな敵、ヴァイスが

現れた。圧倒的な力にレアードの街は再び暗闇に陥ってしまう。そんな中セシルは事件の黒幕に当たる外道魔術師を捕まえたのだった。

第1話ー1～修行と勉強と、ときどきテスト～（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。ファトシュレーンシリーズの第3弾、今ここに開幕です。作者が就職活動なため第3弾の執筆が大幅に遅れてしまい申し訳ありませんでした。これからも以前までのペースとまではいきませんが何とか更新していくのでよろしくお願いします。

第1話－1～修行と勉強と、ときどきテスト～

いつも通り天気のよい朝。
今日も暑い一日が始まりそうだ。
さぁ、今日も勉強頑張るぞ！

「おはよーっす…」

洗面所で一人気合を入れている僕のところに、だらしないジャージ姿でまだ半ば夢の中をさまよっていそうな顔をした級友のウェスリーがやってきた。
「あのねぇ、ウェスリー。せっかく人が気合を入れているところにそんな格好で入ってこないでほしいんだけど？」
「朝っぱらからそんなテンション高くしてられるかっての。だいたい、俺達大魔導士はもう学校の定期試験は関係ねぇのに、何で学校に行かなきゃいけないんだよ」
「今まで何回もやってきたことに今更文句言うのはどうかと思うけどね」
「これぱかりは何度文句を言っても言い足りねぇよ」
「とにかく顔でも洗って目を覚ましなよ」
僕はかけてあったタオルをウェスリーに投げるが、まだ頭のエンジンが回転していない彼はそれを顔面に受けてしまう。そして、こともあろうか視界が暗くなったことでその場で倒れこんで寝てしまったではないか。
「もう勝手にしなよ…」
呆れた口調でそう言い、僕は洗面所を後にした。
食堂に行くと、既に寮長のアキト先輩がおばちゃん達と一緒に食事の準備をしていた。
「おはようございます」

「あらセシルちゃん、おはよ」
「おはよう、セシル」
キッチンの向こうからアキト先輩と食堂のおばちゃん達の声がする。
「セシル、皆の分の食器をカウンターに並べてくれ」
珍しくアキト先輩が厨房に立っている。そういえば以前、料理が趣味だと言っていたっけ。
「アキト先輩、今日の朝食は何ですか？」
カウンターの外側から問いかける。
「今日はサンウオの塩焼きと味噌汁、あとは漬物とご飯だな」
「ずいぶん変わったメニューが多いですね」
「ラウナに教わったんだよ。東の大陸ではパンの代わりに白米を主食にしているらしいんだ」
「へぇ～」
ラウナちゃんはアキト先輩と同じく、生徒会役員の一人で剣道や茶道といった東の大陸の文化に詳しい女の子だ。何度か一緒に戦ったこともあるけどとても強かった。少し前からノエルちゃんの実家が営んでいる銘菓店でアルバイトをしている。街が壊されたときは彼女と一緒に中央通りでクッキーを配っていることもあった。
「ほい、一丁上がり」
アキト先輩は焼きあがった魚が入ったフライパンを持ち上げ、カウンターに並べられた皿に手際よく焼き魚を置いていく。
「はいはーい、皆さんご飯だよぉ！」
食堂のおばちゃんが寮全体に聞こえるような大声で叫ぶ。
一日の食事はおばちゃんのこの声から始まる。これを機に、ここ男子寮に入っている全ての教師、生徒が食堂に集まってくるのだ。
一番にやってきたのは僕の仲間（パーティ）の一人であるギルバートだ。彼はもともと戦士養成所という規則に厳しいところにいたためか、時間規則はきっちりと守る。
「おはよ、ギルバート」

「うむ、よい朝であるな」
ギルバートは僕の挨拶にそう返すと、静かに食卓についた。その後も次々と寮内の男子達が眠そうに、気持ちよさそうに降りてきて食卓についていく。
僕とアキト先輩は全員が来たのを確認してから、最後に食卓につく。最初は特に会話もなかったが、ふとアキト先輩が話を切り出してきた。
「テスト勉強のほうはどうなんだ？」
「え？いや、その……僕は」
口ごもる僕の表情の奥を察したのかアキト先輩は乾いた笑みをこぼした。
「そう言えばセシルはもう大魔導士だったんだよな。学校での定期試験はもうないんだったよな」
「……」
「気にするなよ。別に今更お前に劣等感なんか抱かないから」
アキト先輩はおかしそうに笑う。
「あっという間に抜かれてしまったな。生徒会に入ってからは特にあっという間だったよ」
アキト先輩は懐かしそうに話す。
そう、僕がファトシュレーンに入学した頃のアキト先輩は十四歳ながら、既に上級魔術士の一級だった。
「確か、僕が入学した年の最後に生徒会に任命されたんですよね」
「その頃は確か、俺が高等魔術士の七級でお前が初級魔術士の三級だったね」
「よく覚えてますね」
「忘れるものか。俺にとって君は良き飛び級仲間であり、ライバルでもあったんだから」
そうだった。生徒会からお声がかかる前まではアキト先輩も僕と同じで、飛び級の常連としてファトシュレーンでは有名だったんだ。
「生徒会に入ってからはマジで今までの生活バランスが崩れて、元

に戻るようになっていた頃にはすっかり同じ階級にいたんだものな」
「生徒会がなかったら、僕はアキト先輩にはかなわなかったですよ」
「そうかもな。だけど、俺は生徒会に入ることが嫌だったわけじゃないんだぜ？前の生徒会長から生徒会への勧誘を受けた時ほど、自分を誇りに思えた時はなかった。すごく嬉しかったよ。自分がこの学校の治安に携われるんだって浮かれていた」
「先輩らしいですね」
「だから、その代償として勉強の時間が失われても悔いはなかったよ。何度か降級した時は悔しかったけど」
　アキト先輩は本当に懐かしそうに語る。
「そういえばセシル、特訓のほうはどうなんだ？お前のことだから勉強はたっぷりやっているんだろう？後は……」
「魔法力の問題ですね。自分では以前より力はついてきていると思うんですけど、こればっかりは実際に道具か何かで計ってみないと安心できませんね」
「別に道具で計る必要はないじゃないか。同じような実力者と模擬試合をしてみればよくわかるぞ」
「ドクターエックスの魔物達……ですか？」
「いや、対人同士での戦いかな。相手と同じ条件下で戦えば、自分の戦い方を再確認できるし、弱点も補強できる」
「考えたことなかったです…」
「そうだろうなぁ。そんなこと考えていたらドクターにたちまちお仕置きされるよ。『わしの研究に協力してくれるんじゃなかったのか！？打ち切りじゃ！』とか言ってさ」
「確かに…」
　ドクターエックスは意外と子供っぽいところがあって、すぐにすねてしまうこともあるんだ。
　僕達は怒っているドクターの姿を想像して思わず笑ってしまう。
「セシルちゃん、アキトちゃん！いつまで食べてるの！片付かないから早く食べてちょうだい！」

おばちゃんの声にハッと辺りを見回してみれば、僕達以外の皆はすっかりご飯を食べ終えて食堂を後にしている。
僕達は喋るのをやめ、無言でご飯とおかずを口の中に押し込んだ。

「ものは相談なんだけどさ、セシル…」

何とか食事を食べ終え、食器の片づけをしながらアキト先輩が言う。
「さっきの対人戦の話、できれば終業式後に俺達とやらないか？」
「終業式後に先輩達と……ですか？」
「さすがにテスト週間中にやるのは問題だからその後で。今までの功績ぶりに値するかどうか見てみたい」
「……いいですよ。ただ、僕の一存では決められません。少し待ってくれませんか？」
「わかった」
アキト先輩は小さく頷き、そのまま食卓を拭くために布巾を持ってテーブルに行ってしまった。

第1話－2～修行と勉強と、ときどきテスト～

「ものは相談なんだけどさ、セシル…」
何とか食事を食べ終え、食器の片づけをしながらアキト先輩が言う。
「さっきの対人戦の話、できれば終業式後に俺達とやらないか？」
「終業式後に先輩達と……ですか？」
「さすがにテスト週間中にやるのは問題だからその後でさ。今までの功績ぶりに値するかどうか見てみたくなった」
「……いいですよ。ただ、僕の一存では決められません。少し待ってくれませんか？」
「わかった」
寮長さんは小さく頷き、そのまま食卓を拭くために布巾を持ってテーブルに行ってしまった。

先生達の魔力ですっかり元通りになった学校では、いつもと同じように授業がなされている。
マリノちゃん達のクラスでも、リプルちゃんのクラスでも、ギルバートのクラスでも、そして僕達のクラスでも。
「あぁ、かったりぃ～」
僕の席の後ろではさっきからウェスリーの『かったりぃ～』コール。さすがにうっとうしいのでウェスリーの座っている空間にだけ沈黙フィールドを張り、授業を消化した。
ちなみに学校の定期試験を受けない大魔導士クラスはこの期間何をするかというと、賢者資格試験のための問題演習や復習がほとんどであるため、ウェスリーが言うように人によってはかったるさを覚えるかもしれない。それはわからないでもないが、さすがにウェ

スリーのレベルまで行くともはやうっとうしい以外の何者でもない。
結局、僕の後ろで無視し続けた僕相手にじゃれていたウェスリーは先生に見つかり、あえなくお仕置き魔法を喰らうのだった。

「かったりぃ〜」

お仕置きを喰らったというのにまだ言うかこいつ…。

「わかるよウェスリー。もうかったるいよぉ…」

と、ここにもウェスリー同様かったるいを連呼するうっとうしい人がいた。
「ちょっと、誰がうっとうしい人ですって！」
「貴様しかいないであろう、マリノ？」
ギルバートがビシっと指を差す。
「まぁ、マリノちゃんやウェスリーさんに関わらず鬱になるのはわかるけど…」
「ここまでになるといきすぎとしか言えないよね」
柔らかい物腰で眼鏡のずれを直すノエルちゃん。
「ノエルちゃんはお勉強大丈夫なの？」
自分の書いたノートを熱心に読んでいるノエルちゃんの横でジュースを一生懸命ストローで吸っているリプルちゃんが尋ねる。
「あんまり自信はないかなぁ。でも、あと一週間あるからそれまでにはノートをまとめてばっちりにするつもりだよ」
ノエルちゃんはにっこりと笑って言う。彼女はマリノちゃんと違って根っからの努力家で、苦手分野も先生や上級生の女子、僕に聞いたりしてちゃんと自分で解決をしているひたむきな娘なんだ。それに比べて――
「あにょぅ…」
じっとりとした目つきで睨むマリノちゃん。

「そんな鬱な顔している暇があったら少しは昼休みも使って勉強しなよ」
「嫌！昼休みはごはんのためにあるものじゃない！それを勉強に使うなんて死んでもいーやー！」
「そうだそうだー！」
マリノちゃんに同調するウェスリー。
「駄目だこりゃ…」
「何を言っても馬の耳に念仏だな」
「ほんとにもう…」
「ねぇねぇギルちゃん。お馬さんってお経がわかるの？」
「リプル、今のはそういう意味ではなくてだな…」
じっとりとだれるダークサイドとは裏腹にこっちはこっちでいつもの平和な会話を繰り広げている。
こんな個性豊かな人達がいっぱいいるのによくパーティを組めたものだ。
僕はしばしばそう思う。

さて、そんなこんなで期末テストまであと六日。

第2話ー1～図書館でバクバク！？愛の告白大作戦～

学校の授業が全て終わった放課後、僕達はドクターエックスの特訓もそこそこに期末テストに向けた準備も着実に行っていかなければならなかった。

「はぁ、憂鬱だな～。こんなにも特訓がもっと続いてほしいなんて思ったことなかったのに」

コロシアムの入り口を何度も振り返りながらマリノちゃんが恨めしそうにつぶやいた。

「そんなこと言わないで頑張ろ！テストをのりきったらいっぱいいっぱい遊ぼ！」

「リプルは相変わらず前向きだなぁ…」

いや、君が後ろ向きすぎるだけだよ。

「マリノ、後で部屋に行っていい？一緒に勉強しよう」

「そうしてくれると助かるよ。あたし、マジで今回の範囲全然わからなくってさ」

そんな話をしている女子組の後ろで僕達も同じような会話をしている。

「ギルバートはテストをあまり嫌がらないね」

「こればかりは避けようがないからな。しかし、紙に答えを書く試験というのは初めてなのだが…」

「えぇ、マジかよ！？」

「うそ、マジでぇ！？」

ウェスリーと前で話していたマリノちゃんが同時にリアクションをする。

「う、うむ。戦士養成学校では知識よりもその技術力を問われたからな」

「さすが戦士養成学校だな…」

「体を動かす試験だったらどれだけ楽なことか…」

マリノちゃんが羨ましそうに言うが、ファトシュレーンも実力主義だけあって筆記と同じくらいの量の実技もあったはずだ。
「……」
そのことを聞いた瞬間、マリノちゃんが急に無口になる。
「そっちのほうはどうなの？」
もはや結果はわかりきっているだろうが、ノエルちゃんが尋ねる。マリノちゃんは僕達に聞こえないようにノエルちゃんにだけ耳打ちをする。それを聞いてノエルちゃんは困った表情を浮かべる。やっぱり予想通りの答えが返ってきたんだな。
「じゃあさ…」
僕はあることを思いつき、口を開く。
「これから図書館に行かない？」
『図書館？』
全員が声を揃えて言う。
「こんな暑い日は冷房の効いている図書館でやったほうがはかどるんじゃないかと思って」
「まぁ、涼しい分自室でやるよりかははかどるか」
「そうだね。それに静かだし」
マリノちゃんはもはや観念したかのように、ノエルちゃんはかなり乗り気で頷いた。
もちろん、他の三人も一緒に学校から街の図書館へと繰り出した。

「うっひゃあ、涼しい～」
建物の扉を開けて中に入るなり、涼しく心地よい風が吹いてくる。
「わぁ、レアードの図書館って大きくて広いんだねぇ」
まるで子供のように無邪気にはしゃぐリプルちゃん。
「こらこら、本を読んでいる者の邪魔になる。大人しくするのだ」
ギルバートがはしゃぐリプルちゃんを捕まえるために早足で彼女を追いかける。アーミーブーツなんか履いているものだから早足で

も結構音が目立っていることに彼は気づいていないんだろうな。
「さてと、じゃあまずは何から片付けようか」
ようやく全員、席に着いたところで僕達は早速勉強を開始する。
といっても、好き勝手にやるのではなく基本的にはこのメンバーの中でもっとも上の階級にいる僕とウェスリーが残りの四人の勉強を教えるといういつも通りのスタンスである。
（ノエルちゃんとリプルちゃんは大丈夫そうだから…）
僕は向かいに座っているマリノちゃんに尋ねる。
「わからないところは何でも聞いてね」
「全部わからないんだけど……さ」
語尾は消え入りそうなくらい小さな声だったが、僕は優しく微笑んだ。
「じゃ、もう一度範囲のところを反復してみようか」
僕はまず筆記テストの難関といわれている術式の教科書を開くと、マリノちゃんにわかるようにゆっくりと丁寧に教えていった。

「ここは……で、こういう式が組めるでしょ」
「あ、ほんとだ」
「で、後は連立方程式の要領で解いていけば…」
「できた！」
「そう、それだよ」
マリノちゃんが最も不得意としている術式の問題もだいぶ慣れてきたようだ。この手の問題は普通の学校で教えている数学と同じで、とにかく数をこなすことが大切なのだ。
「そろそろ休憩にしようか。飲み物でも買ってくるよ」
「あ、待って。あたしも行く」
僕達は皆に一言断りを入れてから魔導販売機へと向かった。
飲み物を買い、ロビーのソファに二人並んで座る。
（久しぶりだな、マリノちゃんと二人でいるのも）

「いつぶりかなぁ、マリノちゃんと並んで椅子に座るのは？」
「！？」
「…とか考えてたでしょ？」
「鋭いね…」
「あんたの考えるようなことなんて手に取るようにわかるわよ」
マリノちゃんは呆れまじりに笑うと、紙コップの中身を一口飲んだ。
「でも、たまにはあんたとゆっくりいるのもいいかもね」
「前に二人だけで話したのはパーティを組んだ時だったっけ」
「うん、もう一ヶ月くらいだね」
「その間にまたいろいろあったからなぁ…」
「ほんと。セシルといると退屈しないよ」
「それって褒めてるの？」
「どっちだと思う？」
「う～ん、じゃあ褒めてる」
「じゃあって何よじゃあって」
「マリノちゃんのことだからどっちの答えを言ってもその逆を言われそうだったから」
「む、よくわかってるじゃん…」
「マリノちゃんの考えていることだって手に取るようにわかるよ」
「むむ…」
「僕もマリノちゃんといると退屈しないよ」
「へ？」
マリノちゃんが文字通り目を点にする。
あれ、今のはちょっと変な道に突っ込んでしまったかな。端から聞けば告白っぽく聞こえなくもないような……。いやいや、マリノ

ちゃんが誰を好きかなんてずっと前から知っているんだ。決してそんなつもりで言ったわけじゃないんだ。
「セーシルったら、今のもしかして告白のつもり～？」
マリノちゃんがからかうような目で僕を見る。
「べ、別にそんなつもりじゃないよ！ただ、僕は純粋に…」
あぁ、なぜだろう。弁解すればするほど顔のあたりが熱くなってくる。ひょっとして僕は、ずっと気がつかなかったけど…。
「別に、あたしはそれでもいいよ…」
「は？」
今のはどういう意味だろう。
入学してからずっとフレッドさんに憧れていたマリノちゃんが、ずっと好きという感情を持っていたマリノちゃんが僕のことを…？

パチン。

「ハッ！？」
僕は急に夢から覚めたような気分になった。
「い、今の音は…？」
「アハハハ、セシル引っかかったー！」
僕の隣ではマリノちゃんがケタケタと笑い転げている。
「あんたってばほんと単純なんだからさ。ま、おかげで魔法はかけやすかったけど」
やっぱり……。
どうもおかしいと思ったんだ。いくらなんでもありえなさすぎる展開だった。
「大道芸人を目指す身だからね、幻術系魔法くらいばれないように

使えなきゃね」
マリノちゃんは笑いながら魔法で指を蛇のように柔らかく曲げて遊んでいる。
「へっへー、本気にしたセシル？」
「……」
あまりの馬鹿馬鹿しさに僕はマリノちゃんに反応する気すら失せていた。
「ありゃま、その顔はずいぶん本気にしてたみたいだね」
「しないほうがおかしい…」
僕はやっとのことでそうつぶやいた。
「アッハッハー。このあたしに告白なんて十年早いわ小僧！なんちゃってー」
マリノちゃんは愉快そうに笑いながら先にロビーから去っていった。
「新手の意地悪だ。耐性つけられるようにしとこう…」
僕は改めてマリノちゃんも目標に向かって順調にレベルアップしていることを知った。

第2話ー2〜図書館でバクバク！？愛の告白大作戦〜

とんだアクシデントがあったものの、僕はその後もマリノちゃんに勉強を教えつつ、リプルちゃんとノエルちゃんの勉強のほうも見てあげた。ギルバートは相変わらずウェスリーの熱い指導を受けていたなぁ。

「すっかり遅くなっちゃったね」

閉館時刻ギリギリまでいたためか、日が長くなった夏空もポツポツと星空に変わりつつあった。

ノエルちゃんは今日は家に帰ると言い、僕達と別れた。リプルちゃんも教会の子供達ともう少し遊んでいくと言うので、中央通りで別れることになった。

学校に戻った僕達は、マリノちゃんを寮まで送っていくためにウェスリーとギルバートと別れた。ギルバートもついていこうとしたが、ウェスリーに麻痺の魔法をかけられ引きづられながらウェスリーと共に男子寮への道に去っていった。

「別にいまさら見送りなんかしなくてもいいんだけどね〜」

マリノちゃんは苦笑しながら言う。確かに学校からそれほど離れているわけでもないし、第一学校内だから変質者に襲われることもないだろうけど、それでも女の子を家まで見送るのは男として義務だと思う。

「そんなものかなぁ？」

「そういうものだよ。まぁ、相手が僕だから別にいいって言ったのかもしれないけどね」

昼間の幻術の皮肉も込めて言ってみる。しかし、マリノちゃんからは予想外の答えが返ってきた。

「セシルでもあたしは嬉しいよ。いつもそうやって心配してくれる」

もっと別の答えが返ってくることを予想していただけに、次の文句が言えなくなってしまった。

「フレッドさんのことは確かに好きだけど、あたしはあんたのことも好きだよ。いつもお人好しでへらへらしているセシルが」
図書館のときみたいに冗談めいた調子じゃなく、真剣な顔をして言うマリノちゃん。
今日のマリノちゃんはほんとにどうしたんだろう。そして、僕も。彼女と話すのにこんなに胸が熱くなったことなんてなかったのに。
「め、面と向かってそんなことを言われると照れるな…」
真剣な顔をして言うマリノちゃんが今はとても可愛く見える。
まさか、まさか僕は……。

ピシィ。

「ハッ！？」
僕は再び夢から覚めたような気分になる。そして――

「ププ……」

横には笑いをこらえきれていないマリノちゃんがいた。
「ブァーッハッハッハ！セシル、ばっかでぇー！」
またも腹を抱えて大爆笑するマリノちゃん。
一度あることは二度あるものだなぁ。まさかおんなじ手に引っかかるなんて…。
「今日のセシル面白すぎ～！」
マリノちゃんは僕の肩をバンバン叩いて大爆笑する。僕はもう呆れることも笑うことさえもする気力がなかった。
穴があったら入りたいとは、こういうときに使うものなんだなぁ。
僕は女子寮からの帰り道、ずっとそんなことを思っていた。

第3話－1～頼もしき援軍～

キーンコーンカーンコーン。

今日も朝から学校のチャイムがいつもと同じ音色を奏でている。

「いよいよ始まったな…」

「そうだね」

緊張した面持ちで僕達はチャイムの余韻に浸る。

そして、茶をすする。

「いやぁ、それにしても寂しいものだなぁ」

「確かに。まさかこんなに人がいなくなるものだとは思わなかったよ」

僕達は笑いながら茶をすすっては、談笑していた。

「大魔導士になってこういう特典がつくとは思わなかったぜ」

ウェスリーがせんべいをバリバリと食べながら愉快そうに笑う。

「ウェスリー。一応僕達にも試験があることは忘れるなよ」

「わかってるって」

ウェスリーはへらへらと頷きながら菓子ばちのせんべいに手を伸ばす。

今日は期末試験の初日……だが、僕やウェスリーら大魔導士クラスは年に二回しかない魔術師会の賢者認定テストしかないため、学校の定期試験はもう受けなくてよいのだ。

「まさかテストがないことがこんなに素晴らしいことだとは思わなかったぜ。ちょっと早い俺達だけの夏休みだな」

「ウェスリー！その間に僕達にはやらなければならない課題があっただろ？」

「あ～ん、そんなもの知るかよ。てきと～にやるさ」

「まったくもう」
「寮長もいねぇから好き放題できるしな。しかし、流石にギルバートの奴に連日で勉強を教えていたら眠いな。今日のところは一日中寝てるとするか」
ウェスリーは大きく伸びをすると、口にせんべいをくわえてそのまま談話室から去っていった。
まったく、相変わらずだらしない奴だ。でも、僕も昨日や一昨日はずっとリプルちゃんやエリスさん、ラウナちゃんに付きっ切りで勉強を教えていたから少し眠い。
（いや、だめだ！ウェスリーじゃないけどこの時間は有効に使わなくちゃ）
テスト期間中はほとんど自分の勉強に手が回らなかったからその分、急ピッチでこなさなきゃ。しかし――

「ふぁ～」

眠気には勝てなかった。
（少し散歩でもしてくるか）
街の中でも少し歩けば目が覚めるだろう。
僕は身支度を整えると、学校の裏門からレアードの街に繰り出すことにした。

レアードの街も、一時期は恐怖に怯えた街になったけど、だいぶ明るさをまた取り戻しているようだ。でも、街の人達の中には時々不安そうに空を見上げる人達もいた。
確かに、あいつは『また来る』と言っていた。そんな台詞を残されて不安じゃないわけがないか。早いところ、何か有効な対策を打たないといけないよな。
いっそのこと聖王都バレルから軍隊を丸ごと派遣してもらうってい

うのはどうだろうか。完璧な防衛線が揃えば、いくらあいつでもそう簡単にレアードを攻撃できなくなるんじゃないだろうか。

『もうちょっと楽しめるかと思ったんだけどねぇ。魔法使いってのは案外ひ弱だったんだね』

虚空に去っていく寸前のあいつの言葉が脳裏に浮かぶ。いくらまだ修行段階のアキト先輩が相手だったからとはいえ、最上級（トップクラス）の魔法でダメージ一つ受けていなかったなんてありえない。でも、それが現実だった。

バレルの軍隊はともかくとして、魔法戦術では僕達に勝ち目があるのだろうか。最上級クラスの魔法ですらダメージを与えられなかった敵に勝つ術などあるのだろうか。

「……」

何を弱気になっているのだ。いくらなんでも僕達だけで決着がつく戦いではないだろう。いずれは先生達に託して、僕達はその後方支援をすることになるはずだ。いくら魔法に耐性があったとしても、先生達が放つ高等魔法にはかなうまい。

一ヶ月前、僕達パーティをたった一撃で全滅させた高等魔法。

セリカ先生はあれでもまだかなり手加減をした威力だという。全力で放ったならば、レアードの街一つくらい簡単に壊してしまうかもしれない。そうなれば、流石のあいつもしっぽを巻いて逃げていくことだろう。

「……」

でも、やっぱり釈然としない。五月のあの日、ノエルちゃんが見つけた白い光を放つ流れ星が連れてきた見たこともない魔物達との戦いから始まって、僕達はずっとこの事件に関して重要な部分に触ってきたはずだ。今更、たった一人の相手に歯が立たなかったからと言って先生に託すなんて何か無責任な気がする。ここまで関わったのだから、最後まで見届けたい。僕達の手であいつらをレアード

から追い出したい。

「あら、セシル君？」

後ろから声をかけられ、ハッと我に返り後ろを振り返った。

第3話－2～頼もしき援軍～

「やっぱり。どうしたの、こんなところで」
「あ、ノエルちゃんのお母さん…」
声をかけたのはノエルちゃんのお母さんだった。
「おはようございます」
とりあえず、まずは挨拶。
「何だかすごく怖い顔をして歩いていたわよ。何かあったの？」
「え？僕、そんなに怖い顔をしてました？」
「ええ。とても思いつめた表情をしていたわ…」
ノエルちゃんのお母さんが心配そうに話す。
「本当に大丈夫？うちで休んでいく？」
「いえ、大丈夫です。連日徹夜でちょっと疲れていただけですから」
「徹夜？ああ、そういえばもうそんな時期ね」
ノエルちゃんのお母さんは納得したように頷き、ふと首を傾げる。
「セシル君はどうしてこんなところにいるの？学校は期末試験のはずでしょ？」
「大魔導士クラスでは、もう学校の試験は行われないんです。賢者になるための試験は年に二回、バレルで行われますから」
「そうなの。じゃあもしかして徹夜したっていうのは…」
「ノエルちゃん達に勉強を教えていたんです。学校の定期試験はほとんど受けてきたので問題の傾向とかも伝授しておきました」
「それは頼もしいわね」
ノエルちゃんのお母さんはクスクスと笑う。
「ところでお母さんこそ、どうしてこんなところに？お店があるはずでは…？」
「店は旦那に任せてきたの。私は前にノエル達がやっていた露店販売を続けているのよ」
「そうだったんですか」

「こんな状況を本当は喜んではいけないのかもしれないけど、おかげで今まで知名度の低かったうちの店にもお客さんが入るようになったわ」
「よかったですね。味は抜群にいいですから、街の皆に知ってもらえれば絶対に繁盛すると思っていましたよ」
「ウフフ、ありがとうセシル君」

「おーい、カエラ！」

中央通りの東側から中年男性が走り寄ってきた。
「あら、あなた」
ノエルちゃんのお母さんは親しそうに微笑む。
（あなた、ということはお母さんの夫？つまりノエルちゃんのお父さん？）
見た目はどこにでもいる普通の中年男性といった感じだが、長身で優しそうな顔つきはいかにもノエルちゃんの父親といった感じだ。ノエルちゃんはこの二人の優しさをすべて受け継いだに違いない。
「？　カエラ、こっちの少年は？」
「あなた、この子がセシル君よ。ノエルといつも仲良くしてくれている…」
「君がセシル君か。話はノエルやラウナさんから聞いているよ」
ノエルちゃんのお父さんはそう言って優しく微笑む。
「ところでどうしたの？そんなに急いで」
「ん？ああ、実はハープの葉の在庫が切れてしまったみたいでな。そっちの余りがないか聞きに来たんだ」
「ハープの葉はこっちにはないわねぇ…」
「そうか…」
「今日のところは仕方ないんじゃないかしら。あれは主にお菓子の飾り付け用だから」
「うぅむ、そうか。ないのならば仕方ないか…」

どこか諦めきれない様子だったノエルちゃんのお父さん。ハープの葉はそんなに珍しい物でもないのだが、レアードのどの店にも置いていないのだ。
「あの、よければ僕が探してきましょうか？」
気がつけばそんなことを言っていた。
「いいのかい？」
ノエルちゃんのお父さんの問いに僕は「はい」と小さく頷く。
「でも、この辺りでハープの葉が取れるなんて聞いたことないわよ」
ノエルちゃんのお母さん、カエラさんの言葉に僕は「何とかなりますよ」と明るく答えた。
「試験がなくて暇してましたから、散歩も兼ねてその辺りの森を探して見ます」
僕は二人に丁寧に頭を下げると、まずは学校に戻った。その理由として僕自身ハープの葉について知らなかったこともある。
学校に戻り、図書館で薬草辞典を引いてみる。
（あった！）
辞典の真ん中のページにハープの葉のイラストと説明が載っていた。
「甘い香りを放つ葉で、主にお茶の中に入れたりするものだが、その形からお菓子に添える場合も珍しくない…か」
とにかくどんな形をしているかはわかったぞ。後は、主な産地だが……。
「暖かい場所に多い……」

それだけかい！！
まぁ、本に突っ込んでもしょうがないわけだけど、いくらなんでも主な産地が『暖かい場所に多い』はないだろう。はぁ、とりあえ

ずこの辺りの森をしらみつぶしに探してみるしかないのかな。レアードの気候は比較的温暖だから基準は満たしていると思うし。でも、その前にもう少しこの学校で情報を集めておいたほうがいいかな。もしかしたら有力な情報をくれる人がいるかもしれない。

僕は図書館を出ると、校舎の中を歩いて人を探した。そして、数分後に気づくのだった。

今ってテスト中じゃん！！

つまり、人なんかその辺を歩いているわけもなく、さらに休み時間になっても教室で勉強しているに違いないんだ。

（こんな状況でテスト勉強に関係ない事を聞いて回るのも失礼だよな）

まったく、今日の僕はボケたことばかりしているな。

「あら、セシル君？」

突然、後ろから聞こえたどこかほんわかとした声。

「セリカ先生？」

「こんなところで何しているの？今はどの教室もまだ試験中ですよ？」

「すみません。実は少し探しているものがありまして図書室に行っていたんです」

「賢者認定試験の？」

「いえ、それとは別で…」

僕は直感で思った。セリカ先生なら料理上手だしきっとハープの葉のことも知っているだろうと。

「ハープの葉？」

「ご存知ありませんか？」

廊下から食堂に場所を移し、事情を説明する。

「ううん、知っているけど。どうしてまたハープの葉なんて探しているの？」
その目は明らかに『セシル君は料理とかしないよね？』みたいなことを言っているように見えた。そして、しばらく考え込むような素振りを見せると、目線を元に戻して言った。
「そうねぇ、この辺りだったらサントロ街道を南に進んだバージェの森にあるかしらね」
「バージェの森……ですか？」
「そうよ。立て札が立っていると思うからすぐにわかると思うわ」
「ありがとうございます、セリカ先生！」
「ただ、魔物も生息しているから装備を整えていったほうがいいわよ」
セリカ先生から有力な情報を得た僕は、一度寮に戻り、簡単な冒険の準備をしてから一路バージェの森目指してサントロ街道を南に下った。

第3話ー3～頼もしき援軍～

セリカ先生の言っていたとおり、南に向かって一時間ほど進むと分かれ道に出て、その中央にはそれぞれの行き先を示す看板が立っていた。

「左は港町ミンフェン、右がバージェの森…か」

今回はミンフェンに行く用事はないので、迷わず右へ行く。

ミンフェンの港町は僕がファトシュレーンに入学するために定期船を利用して以来だからかれこれ三年ほどになる。港町としてはかなり小規模でどちらかというと定期船の出入りにしか使われていないような港だ。そのため、海にいけばよくあるシーフードというものはミンフェンにはあまり置かれていない。レストランとかもレアードにあるような主に肉や野菜を中心としたメニューが多かった覚えがある。レストランから見える海はとても綺麗なんだけどな。

さてと、いよいよバージェの森か。エスカルの森に比べると、かなり空気がおいしくて清々しい。こういうのを天然の森っていうんだろうな。

獣道を進みながら、僕は記憶しておいたハーブの葉のコピー映像を魔法力で映し出す。

「この形の葉っぱを見つければいいんだな」

森の中には確かに木々の葉っぱが鮮やかに色づいているが、この中からハーブの葉を見つけるのは至難の業である。木の枝についている葉や落ちている葉を一枚一枚調べながらコピー映像と比べる。

（色は緑だから、この森のほとんどの葉っぱは当てはまるんだよな。後は形と大きさなんだけど）

見たところ、ハープの葉は左右に分かれてちょうど果物か何かの新芽のような形をしていることから、きっと何かの木に枝についているわけではなく、地面に植わっているものだろうと思うけど…。

「そんなにむきになってなにを探しているんだい？」

「！？」

軽い感じなのに、どこか不気味なこの声は…。

「ヴァイス！！」

「お、名前覚えていてくれたのか。これは光栄だねぇ」

木の上に座っているヴァイスはケタケタと笑う。

「今日はお仲間とは一緒じゃないのかい？」

「お前には関係ないだろう…？」

「おやおや冷たいなぁ！？こうしてまた遊びに来てやったって言うのにさぁ」

「黙れ！またファトシュレーンを攻撃しにきたのか！お前達の主の目的は何なんだ！？」

「さぁ？あいつらの目的なんか知ったことじゃないし。それに、俺の主ってのは語弊だぜ？俺はあいつらの見方についた覚えなんざねぇ」

「え？」

「能力的に俺達より劣っている人間どもに付く義理なんざ持ってないって言っているのさ」

「じゃあ、お前はどうしてファトシュレーンを攻撃した！？」

「そんなもの決まっているじゃねぇかぁ！」

ヴァイスが馬鹿笑いをしながら両手を上にかざす。

「血だよ血。じわじわとなぶりながら血を噴出し、倒れ、死んでいく人間どものあの哀れな姿を見たいがためさぁ！」

「なんて狂った感情だ…」

「どうとでも言えよ。所詮、人間と魔物ってのは相容れない者同士

だしな。さぁて、ここで会ったのも何かの縁だ。ちょっとの間、俺の遊びに付き合ってもらうぜぇ…」
ヴァイスは長い舌で自分の唇を舐めまわすと、木から飛び降りた。それに反応した周囲の木々がうねうねと動き出す。
「さっきまでただの木だったのに…？」
「くっくっく、驚いたかよ。だが、この程度の擬態能力も見抜けないなんざますます人間てのは下等生物だよな」
「……」
僕は静かに剣を構える。
くそ、何でよりにもよってこんなところでこんな奴と会ってしまうんだよ。僕一人でどうにかなる相手じゃない。
ここは逃げるしかない。逃げながら先生達に念話で応援を頼むしかない！
「くっくっく、安心しろぉ。まずはこいつらでお前のウォームアップをしてやるからな」
ヴァイスが片手を上げると、木に化けていた魔物達がじわじわと僕との距離をつめる。
「うわあああ！」
僕は炎の魔法を剣に宿し、突進した。
「ぶらぁぁんち、にぃどるぅー！！」
魔物の一体が自分の枝を飛ばし、僕の動きを牽制する。その隙にもう一体の葉っぱによるビンタを食らう。
「まだまだ！」
僕はビンタをするために近づいてきた木の魔物を剣で斬りつける。
「火炎裂波（バーストウェイブ）！」
「キシャアアアアア！！！」
炎をまとった斬撃が木の魔物を足元から焼き尽くす。
「よし、次！」
僕はそのまま近づいてくるもう一体に炎の魔法を浴びせるが、生半可な炎では逆に奴の攻撃性能を上げてしまうことになり、返って

危険だった。
燃えた枝や葉が僕に容赦なく襲い掛かる。
「くそ、これじゃ手がつけられないな」
魔物自体も自分の体が燃えていることでかなり混乱しているのだろう。辺りの普通の木や草まで燃やしにかかっている。

ポロロン。

『！？』
何だ？
森の中なのに竪琴の音色が聞こえる？そして、竪琴の伴奏に合わせるように綺麗なテノールが魔物の気を落ち着かせている。
「今よ、セシル君！」
魔物の後ろから聞こえた声に従い、僕は氷の魔法で作った矢で木の魔物を貫いた。
「誰だ！？」
ヴァイスが叫んだ。
その声に応えるようにふたりの男女がヴァイスを挟むように現れた。
「クルツさん、メリッサさん！？」
「セシル君、無事か！？」
「は、はい。でも、お二人はどうしてここに…？」
「話は後だ。今は目の前の敵を倒すことに集中しようぜ」
「は、はい！」
突然の助っ人がまさかこのふたりでということには正直驚いたが、この二人と一緒ならば、ヴァイスに一泡吹かせてやれるかもしれない。
「気にいらねぇな。人の遊びを邪魔する奴は…」
「何が遊びだ。遊ぶならもう少し明るい遊びをしろってんだ、この陰険野郎」

クルツさんは竪琴をしまい、腰の剣を構える。
「クルツさん、メリッサさん気をつけて！こいつは…」
「ああ、すべて聞いているぜ。とんでもない悪漢だってこともな」
「お二人とも、どうしてそこまで知って…」
「死にさらせぇ！」
ヴァイスの声と同時にハッと我に返った。
（まずい！今からじゃよけきれない！）
僕が気づいたときにはヴァイスの顔が目前に迫っていた。
「時間よ、我が魔力にて停止せよ！フラッシュストッパー！」
メリッサさんが魔法を唱えるや否や、まばゆい光がヴァイスに降り注ぐ。
「ぐぁ！」
閃光に包まれ、ヴァイスの動きが止まる。
「セシル君、早く間合いを取って！いくら高等魔法といえど、時間を止める術は長くは持たないわ！」
これも高等魔法の一つ！？どの魔法研究でも時間を止めることができるなんて聞いたことがなかったのに。高等魔法はそれすらやってのけるのか！？
「ちっくしょう。何なんだ、今の閃光は…」
少し時間が経ち、ヴァイスが時の凍結から醒める。その間に僕達三人の魔法がヴァイスに集中放火する。
「うおわわぁー！」
ヴァイスが雄叫びにも似た悲鳴をあげる。
（効いている？この間の戦いの時はまったく効かなかったのに…）
「くっそ。何だよ、この間よりもかなり違うじゃねぇかよ…」
「大道芸人をなめるなよ。世界を旅して回っている分、戦闘は手馴れているからな！」
「ち、威勢がいいこって…」
ヴァイスは舌打ちをしながら、もう一度攻撃態勢に入る。
狙いは……この三人の中では一番弱い僕！

僕はサッと身をかわし、ヴァイスの直接攻撃をよける。そして、狙っていたかのように、ヴァイスにクルツさんとメリッサさんの魔法の集中砲火が浴びせられる。

「ち、パーティのリーダー格っぽいお前を倒せば少しは楽になるかと思ったのに、世の中思い通りにはいかないねぇ…」

さっきまでとはうって違い、おどけた表情で言うヴァイス。

「ここは一度帰るかな……と」

ヴァイスはそう言うと、この間のように転移の術で一瞬に虚空に消えてしまった。

第3話－4～頼もしき援軍～

「ふぅ、大丈夫だったかセシル君」

敵が完全に去ったのを確認してからクルツさんが僕に向き直って言う。

「ありがとうございます、大丈夫です。でも、お二人ともどうしてこんなところに？」

「実は今、私達ファトシュレーンを卒業した賢者宛にファトシュレーンの先生達が一斉に念話を送っているのよ。事件の真相が少しずつ明らかになってきつつあるそうね」

「ええ。でも、新たな敵が増えてしまって…」

「それがさっきの奴か」

「クルツさん達は知っていたんですか？」

「全部念話で聞いたわ。事件の真相が明らかになってきつつあるということは同時に敵の動きも本格的になってくるということ」

「そこでファトシュレーンの先生達はメリッサを含む卒業生達に応援を求めているってわけだ」

「そうだったんですか…」

「ファトシュレーンを卒業した者として今回の事件は見逃せないわ。だから、これからは私達も君達に全面協力するからね」

「ありがとうございますメリッサさん！あ、でもお二人はどうしてこの森に？レアードへは方角が違いますよね？」

「う……まあ、ちょっとな」

「？」

「実はね、路銀の入った袋を中身だけ抜き取られたのよ。それに気づかないでレストランに入ったものだから…」

「ちょ、ちょっと。それって無銭飲食で逃げてきたってことじゃないですか！」

「まぁ平たく言うとそういうこったな」
「お金の入った袋を持ったクルツがいつの間にかスリにあっちゃってね」
「す、スリに！？」
意外だ。
意外すぎる。
これだけ冒険慣れしている人が今時のスリに遭うなんて。
「し、仕方ねぇだろ！コインドレインの魔法に気づかなくて、袋見たら空だったんだからよ！」

コインドレイン。

高等魔法の一つで、文字通り魔法をかけた相手のお金を奪い取る魔法だ。何でこんな泥棒まがいの術が高等魔法なのかというと、この魔法はもともと魔物などにかけた後、魔法で止めを刺すとその魔物がお金――もちろんちゃんと使えるものだ――になるという変身魔術の一種だったのだが、金銭に困っていた泥棒賢者が誤って人にかけた時、その人の持っていたお金を残らず奪い取れたことから用途がずれてしまったといわれている。
「普通、魔法を発動するときの魔力の波動で気づくでしょうに…」
メリッサさんがじっとりとした目でクルツさんを睨み、クルツさんはますます小さくなっていく。
「アハハハ、しっかりしたクルツさんでもそんなことがあるんですね」
「しっかりしているかどうかは疑問だけどね…」
「返す言葉もねぇ…」
「ところでセシル君はどうしてバージェの森にいるの？」
「あ、そうだった。実は、ハープの葉を探しているんですけど、セリカ先生にもしかしたらここで入手できるかもしれないと聞いたものですから」

「マジか！？おいメリッサ、俺達もハープの葉を探そうぜ。道具屋に売り払えば今日の宿代分くらいにはなる！」
「確かにあればそうなるけど、この森にハープの葉があるなんて在学中聞いたことないわよ」
「さぁ、頑張って探すぞぉ～！」
クルツさんは途端に元気になってハープの葉を探し始めた。
「まったく調子がいいんだから…」
「あ、ハハ。でも、なかったときの反応がちょっと見ものですよね？」
「それもそうね。じゃ、ハープ探しは彼に任せて私たちは少し一休みしましょうか」
「はい」
その後、僕達は一生懸命にハープの葉を探すクルツさんを微笑ましい笑顔で見守りながら戦いの傷を癒した。

クルツさんの努力の甲斐もあってハープの葉はノエルちゃんのお店で使う分は十分あった。クルツさんには悪いけど、その辺りは学校側に説明して何とかしてもらうことにするとしよう。
「おぉーい、セシルゥー！」
学校でメリッサさん達を無事に送り届けた後、僕を待ち構えていたかのようにマリノちゃん達が駆け寄ってきた。
「あんた、また一人で抜け駆けしたわね」
「抜け駆けってほど大層なものじゃないと思うんだけど…」
「クルツさん達が来てるの？」
「そうだよ」
「わぁ～い、嬉しいなぁ」
「しかし何でまた？あの二人は芸をしながら旅をするのではなかったのか？」
「それなんだけど…」

僕はメリッサさん達から聞いた話を彼らに話した。
「じゃあ、とうとう学校は事件解決に本腰を入れるんだね」
「そうらしい。僕もメリッサさんから聞くまで先生達がそんなことをしていたなんて知らなかった」
「結局のところ、あたし達はこの学校の生徒だもんね。いくら関係者といえど深入りはさせてもらえないってか」
マリノちゃんが不機嫌そうに言う。
「ねぇセシル君、クルツさん達に頼めば手品またしてくれるかなぁ…」
リプルちゃんが心配そうにつぶやく。
「それは大丈夫じゃないかな。敵が出てこない限り、クルツさん達も時間はあるだろうから」
「今度、頼んでみようか」
「わーい！」
リプルちゃんが嬉しさを強調するように飛び跳ねる。

「セシル、それで現状はどうなのだ？」
喜ぶ女の子達を微笑ましく見守りながら、ギルバートが耳打ちをしてくる。
「まだあまり賢者の人達は集まっていないみたい。世界中に散っているからしょうがないとは言っていたけど…」
「そうか。なら当面は戦力的に変化はない……か」
「いや、そうでもないかもよ」
「なぜだ？」
「さっきは話さなかったけど、偶然ヴァイスと会ってしまったんだ」
「！！」
「メリッサさん達に助けられたんだ。アキト先輩と一緒に戦ったときはまったく歯が立たなかったのに、今日はヴァイスにかなり致命的なダメージを与えられた」
「何と…」

「あの二人が加わってくれただけで、ヴァイス相手にかなり優勢に戦えたんだ。それに加えてアキト先輩や先生方が加わってくれれば…」
「なるほど…。単に頭数が増えただけではないということか…」
「そういうこと。それに……」

「なーに二人だけで話してるのさ！」

「わ！」
「うぉ！」
マリノちゃんが僕とギルバートの背中を叩く。
「ほら、早く帰ろうよ。みんな、セシルを待っていたんだから」
「僕を？」
「そ。セシルに勉強教えてもらったおかげで今日のテストすっごく調子がよかったんだから。今日もみっちり教えてもらうわよ」
「僕でよければいくらでも教えてあげるよ」
僕のその一言にマリノちゃんが「ばんざーい」と手放しに喜ぶ。どうやら援軍を見つけたのは先生達だけではないようだった。
ただ、言ってから後悔。
僕、昨日から寝てないから二徹になるんですけど……。

第４話－１～真夏の空に数字がびっしり～

夏もすっかり本番を迎えた七月の終わり、ファトシュレーンでも他の魔法学校や普通学校と変わらぬ終業式が行われていた。

魔法学校といえど、所詮は学校なので終業式でやることは普通の学校とほとんど同じ。長時間、校庭に立たされて校長先生の長話を延々と聞かなければならないのだ。

校長の若い頃の自慢話など聞いたって僕達に生きることはほとんどないと思うんだけどね。

まぁ、そんなことを言ったら雷属性の魔法の一発や二発落ちてきそうだから誰も言わない。しょうがないから結局最後まで聞いてしまうんだ。そして、校長の長話メインの終業式が終わった後は各クラスの教室に戻って恒例のあれが返ってくる。二ヶ月前の事件があったため授業自体が割と飛んでしまったことが多かったから多少甘めにつけられているかと思ったが、実際のところそうでもなかったというのが現実だ。数回あるかないかの授業は一回一回の小テストの点数などが如実に成績を物語るだろう。

（うん？）

僕は通知表の下の担任からのメッセージのところに視線を落とす。

『最近のセシル君の活躍は非常に好ましいものです。事件前まではあまり積極的に人と関わることがなかった君も遅ればせながら少しずつクラスに馴染んでいく様子にホッとしています。賢者になることは魔法使いとしての最終目標です。勉強だけでは学べないものをどんどん吸収していってください』

（ロバート先生…）

僕は教壇の上で夏休みの説明をしているロバート先生に小さく頭を下げた。

「それで、飛び級生セシルの成績はどんなものだったんだ？」
一学期最後のホームルームが終わり、待っていたかのようにウェスリーやその他のクラスメート達が集まってくる。
「どれどれ……」
ウェスリーを筆頭に、ほぼ全員が僕の通知表に見入っている。何がそんなに珍しいんだか。しかし、そんな僕の周囲では数秒ごとに「おぉー」だの「はぁー」だのといった歓声が聞こえてくる。
「予想はしていたけど、やっぱり完璧だな。成績平均が九点弱って変態だろお前」
「変態はないだろ。それにしても九点きっていたか。やっぱり、途中からドクターの特訓を受け始めたのが大きかったかな」
「何？じゃあ、お前その前まではもっと成績よかったっていうのか？」
「自慢じゃないけど、だいたい成績の平均は九．五点は言っていたと思うよ」
僕のその一言にクラス内にまた歓声が起こる。
「お前、やっぱり変態だわ」
そんな中、ウェスリーただ一人がずっと僕に変態と言い続けていた。

「それは変態だね」

スパゲッティを食べながらマリノちゃんが吐き捨てるように言う。
クラスメート達と別れた僕とウェスリーは、いつものようにマリノちゃん達と食堂に集まっていた。
「だろぉ」
ウェスリーが他の皆にも僕の通知表を回す。
ノエルちゃんはあまりの次元の違いに目眩を起こし、ギルバートは少し見た後、無言でリプルちゃんに渡し、そのリプルちゃんは目

を輝かせて「すごーい！」と嬉しそうに笑う。
「ねぇ、リプルちゃんの通知表も見せてよ」
「そういえばリプルも飛び級生だったっけな」
「えー？私はそんなに成績よくないよぉ」
リプルちゃんは自分の通知表を大事そうに胸の前で抱きかかえたまま見せようとしなかったが、マリノちゃんの巧妙なテクニックによってあえなく奪われてしまう。
「うわ、これまたすごいものを見ちゃったわ」
最初に見たマリノちゃんが驚きの声をあげる。続いて見たウェスリーも「こりゃ次元違いだな」とため息混じりに答える。
「リプルちゃん、いつの間にこんな勉強していたの？」
もはや反応する気力すら残っていないノエルちゃんが眼鏡のずれを直しながらつぶやく。
「まさに月とスッポンであるな…」
ギルバートももはやまともなコメントをする気力はないようだ。
「どれどれ…」
最後に僕もリプルちゃんの通知表を見る。
「こ、これは…！」
見事なまでに並ぶ十点の判子。左から数字を見ていくと、十点、十点、十点、九点、十点、十点……九点、十点。
平均成績点はなんと……九．六点！！
「うっわぁ…」
流石の僕でもこんな平均点を見るのは久しぶりだな。でも、リプルちゃんも条件は僕と同じはずなのにどうしてここまで差がついたんだろう？
「基本的な真面目さの違いじゃね？」
なんてコメントしているウェスリーは放っといて、と。
「若さの違いではないだろうか？」
ギルバートが難しい顔をしながらつぶやく。
「やだなぁ、ギルバートったら。あたし達とリプルちゃんってそん

なに年齢差ないじゃんか」
マリノちゃんが笑ってギルバートの説を否定する。
「馬鹿にしたものではないぞマリノ。幼い頃のうちのほうが覚えはいいというからな」
負け惜しみかもしれないけど、結局のところ僕も敗因はそこだと思う。
「でも、二人ともすごく成績がよくて羨ましいな」
そういうノエルちゃんの成績も決して悪くない。ただ、やはり戦闘訓練の科目が足を引っ張っていることは確実なようだが。
「マリノはその逆だな。戦闘訓練科目はトップクラスなのに、その他が並だな」
「並とか言わないでよ。マジでへこむじゃない」
マリノちゃんは期末テストの試験はよかったのだが、それまでの小テストなどがちょっと響いていたようだ。
「まぁ、ドクターの特訓もあったことだし致し方ないだろう」
そう言うギルバートの成績は、編入生として何とか面目を果たせただろうというギリギリの成績だった。
「まぁ成績の話は置いといてさ」
マリノちゃんが通知表を鞄にしまいながら言う。
「少し街に遊びに行こうよ。ここ二週間ずっとテストとテスト勉強ばっかりで体がおかしくなっちゃいそうだよ」
「賛成だ。特訓もしばらくおろそかになってしまったわけだし、勘を取り戻さねば」
「よし、じゃあ食事が終わったら皆で街に買い物に行こうか」
「わぁーい、さんせーい！」
リプルちゃんが手放しで喜ぶ。
考えてみれば全員揃ってどこかに行くのはずいぶん久しぶりだった気がする。

第４話－２～真夏の空に数字がびっしり～

レアードの昼下がり、僕達は二週間ぶりに揃って街の繁華街にやってきた。外観も中身もしっかり修復された街は以前と同じ活気に溢れつつあった。ただ、変わってきていたのが――

「僕達もはや普通の生徒じゃなくなったよね？」

「言うなよ。自分でも気がついたらここに来ることに抵抗がなくなっているんだ」

「ア……ハハ」

ウェスリーはため息をつき、ノエルちゃんは苦笑する。僕達のいる場所は武器防具屋だった。

「最近は下のほうのクラスでも戦闘訓練の時の武器自由化が認められてきているんでしょ？だから余計にここを頼りにしてくる人が多いのよ」

と、武器屋の女将さんが話す。

「まぁ、今までレアードの武器屋なんてのは冒険者達ばかりだったから収入源としてはちょうどいいけどな」

武器屋の親父さんが豪快に笑いながら話す。

「しかし、所詮は素人だ。金をかけていい武器を買えば強くなれると思っている奴らも少なくない。これは冒険者にもたまにいるけどな」

「そうだねぇ、武器の攻撃力や防具の防御力なんてものは自分の実力が伴わないと装備していても無意味に近いからね」

「例えば鎧を装備したことのない魔術師が鎧を装備するとか？」

「極端すぎる例だがそういうことだな」

マリノちゃんのほんとに極端な例に肩をすくめながら武器屋の親父さんは頷く。

「店主よ、ここには銃は置いてないのか？」

店に入ってからずっと黙って店内を歩いていたギルバートが不機

嫌そうに聞く。
「お前さん銃使いか？だったら、悪いがここに銃は置いてないんだ。以前は置いていたんだが、あまりにも買う客が少なくてな。弓矢ならあるぜ？」
武器屋の親父さんは店の棚に飾るように置かれている弓矢を指した。
「これではせっかく金が溜まっても我輩だけ武器を新調できないではないか…」
がっくりと首を垂れるギルバート。
う～ん、どうにかしてやりたいけどこればかりは店の都合だものな。僕達は結局ギルバートを気遣い誰も武器と新調しなかった。
「皆、我輩に気を使う必要などなかったのだぞ？」
「ううん、いいんですよ」
ギルバートの横を歩くノエルちゃんが優しく微笑む。
「店主さんもギルバートさんの落ち込みように銃の再入荷を考えてくれていたようだし。その時にまた行きましょう」
「……皆、すまぬ」
「もういいって。それより次はどこへ行くんだセシル？」
「そうだね、次は――」
どこに行こうか？そう言いかけた僕を遮るように中央通りのほうから歓声が聞こえた。
「何だろう？」
「行ってみようよ」
リプルちゃんの言葉に全員が頷き、中央通りへの声のするほうへと行ってみることにした。

たくさんの店が並ぶ中央通りの広場はいつもは子供達や買い物客で賑わっていているが、今日はそんな広場のある一点に観客と、その注目が集まっていた。

「あれ？」
「あそこにいるのは…」
僕達は人混みの隙間から背伸びをして注目の的になっているものを見る。
「クルツさんとメリッサさんだ」
そうか、二人が大道芸を始めたからこんなに人だかりができているんだな。終業式が終わった時間を狙っていたためかファトシュレーンの制服を着た人達も目立つ。
「う～ん、見えないよぉ！」
やはり背の高さの関係上、背伸びをしてもまったく前が見えないリプルちゃんが僕達の足元で唸っている。そして、今回もそんなリプルちゃんを優しく肩車するギルバート。
本当にこの二人って面白いペアだよな。
「おい、セシル…」
大道芸にずっと夢中になっていた僕はウェスリーに背中を突かれ、後ろを振り返る。
「何？」
僕の問いに対してウェスリーは人差し指で小さく、クルツさん達とは違う方向を指した。
あれ？あそこで立っている女性はもしかして……。
「カエラさん？」
僕の声にノエルちゃんも大道芸を見るのをやめて僕のほうを振り向いた。そして、ウェスリーにしてもらったようにクルツさん達の舞台から少し離れたところを指差した。
そこにはクルツさん達の舞台を利用して、お菓子を販売するノエルちゃんのお母さん、カエラさんの姿があった。
「うぅ、恥ずかしいなぁ…」
ノエルちゃんは顔を真っ赤にしてつぶやいていた。
大道芸が終わり、人だかりがすっかり途絶えると、僕達はクルツ

さん達のところへ挨拶に行った。
「よぅ、やっぱり見に来てくれてたか」
クルツさんは嬉しそうに笑う。
「相変わらずの人だかりでしたね」
「まぁな。この辺じゃあまり大道芸なんてやる奴なんていないからな」
「レアードの人達の気持ちを少しでも和らげてあげようと思って」
「そうですね。活気は戻ってきても、やっぱりまだ敵に関する不安が消えきってはいないんです」
「ファトシュレーンの先生達ですら、恐怖したっていうくらいなんだから余程なんだろうな」
「ええ…」
「皆、その話はまたいずれするとして――」
張り詰めた空気を一掃するようにメリッサさんが僕達を見てにっこりと微笑む。
「今日は終業式だったそうね。皆、成績はどんな感じだったのかしら？」
メリッサさんの一言の後、暗黙の了解で皆が通知表を開かされたのは言うまでもない。
「俺が言うのもなんだが、飛び級連中は問題なしだな。マリノは実戦意外がもうちょいってところか？」
「うぅ…」
「でも、決して悪くないわ。グラッツ先生やセリカ先生から貴方達が中心になって戦っていることが多いと聞いていたから、その分成績が下がっているのではないかと少し心配していたのよ」
ギク。
あぁ、痛いなぁ。平均が九点をきったのは…。今まできったことなかっただけに少し今の一言は痛いかも。

「どうしたの、セシル君？」
リプルちゃんが心配そうに顔を覗き込んできたので、僕は慌てて「なんでもないよ」と少し早口で言った。
「さて、だいぶ路銀も稼げてきたことだし飯でも食いにいくか」
クルツさんは投げられたおひねりをにんまりと笑いながら袋にしまいこんでいる。彼らとバージェの森で再会してから一週間ほどしか経っていないのに、もう旅に困らないほどのお金が溜まっているなんて。正直少しうらやましかった。
一学期が終わった。
とんでもない事件が起きて、とんでもない敵が現れた。
これから夏休みに入るけど、どうなるんだろう。今の僕達には先生達の判断を固唾を呑んで見守るしかできなさそうだ。

第5話ー1～たまにはのんびり猛特訓！？～

夏休みに入って最初の週末が訪れた。夏らしく焼きつけるように地面を熱する太陽がギラギラと輝く中、僕は一人寮の自室で勉強をしていた。

マリノちゃんとリプルちゃんはそれぞれの実家に帰省している。

終業式の翌日、学校の掲示板に張り出された掲示には、生徒は例年通り故郷に帰省することを許された。あんな大きな事件があったのにそんなことをして大丈夫なのだろうかと生徒達は不安を隠しきれていなかったが、その対応策として夏休みの前半・中盤・後半の三つの期間に生徒を分散させて帰省させるようだった。その最初の期間に帰省するグループが上級魔術士と高等魔術士、そして追い回しの生徒だった。

マリノちゃんとリプルちゃんは最後までパーティの連携が乱れると渋っていたが、こんな事件が起こっている最中なのだ。帰れるときに帰っておいたほうがいいというグラッツ先生の説得に負け、少し前に帰省した。

二週間前にヴァイスに会ってから、奴は全然ファトシュレーンを襲撃してこない。今が夏休み期間であることを、外道魔術師達は知っているはずだがどうしてだろう。いや、理由がどうあれ攻めてこないことは幸いだ。上級と高等クラスの生徒がいない中、戦力になるのは僕ら大魔導士クラスとクルツさん達、そして先生達だけになるからな。この間は勝利できたが、次もこのまま押していけるとは限らない。

そう考えると、僕は今こうやって賢者になるためとはいえ机に向かっていていいのだろうか。

「……」

僕は問題集を解く手を止め、ペンを置いた。

やっぱり少しでも実戦訓練はしておいたほうがいいのかもしれな

い。僕が何かを決めて動き出そうとした時、ちょうど窓に小石がコツンと当たった。窓の外を見ると、同じように外から僕の部屋を見上げているノエルちゃんがいた。彼女に一言断りを入れ、いつものように寮の外に向かう。
「やぁ、休み中の学校に来るなんてどうしたの？」
ノエルちゃんは自宅から学校に通っているから、夏休み期間中はまったく学校にいないはずだし、来る必要もないはずだが。
「セシル君、どうしているかなと思って…」
言葉を紡ぐノエルちゃんの目はいろんなところを泳いでいる。
「ずっと賢者試験のための勉強をしていたんだ。だけど、どうも集中できなくて…」
「私もそうなんだ。店番をやっていても何か忘れているような気がして…」
「ノエルちゃんもそんな気持ちになったんだ」
「セシル君も？」
「うん。何か今は勉強をするときじゃないような気がして。だから…」
「私も。これからのことを考えると皆の足を引っ張らないようにと思って…」
僕達は顔を見合わせると、クスっと笑った。
「ギルバートとウェスリーを呼んでくるよ。四人で特訓をしよう」
「うん」
ノエルちゃんも安心したように頷いた。

「まったく、こんなくそ熱いのに特訓なんてお前らなんて真面目なんだよ」
僕と同じく寮の自室にいたウェスリーは簡単に捕まった。
「いいではないか。どうせ夏休みの課題など最終日にやれば済むことだ」

そう言って大声で笑っているギルバートは街の武器屋にいた。どうやらギルバートのために一丁だけ店長が銃を仕入れてきたみたいでご機嫌だった。
「ごめんなさい、ウェスリーさん。お忙しいのに勝手なことを頼んでしまって…」
「い、いや。ノエルさんが謝ることないよ。俺も暇してたし…」
ウェスリーは早口でノエルちゃんに言い訳をする。
「それに、気持ちはわからなくはない」
「ウェスリー…」
いつもこうだった。なんだかんだ文句を言いながらもウェスリーは必ず来てくれるのだ。
闘技場についた僕達は二人一組に分かれ、まずはそれぞれの長所を活かした戦術の見直しを計った。
「しかし、そうやって考えてみるとセシルはどっちなのであろうな」
模擬戦闘を行いながらギルバートがぼんやりとつぶやいた。しかし、銃の狙い目だけはぼんやりしておらず、確実に僕の足や武器を狙っていた。
「勉強の成果もあって魔法も数を覚えているし、威力も相当だ。しかしその一方で戦闘になればどちらかといえば我輩やフレッドと共に前衛に出ていることが多い」
「後衛はノエルちゃんやリプルちゃんがいるからね。マリノちゃんの補助に回ることも多いかな」
「こんなことを聞いたことがある。力量が上がってくれば経験から自ずと前後衛の区別はなくなってくるが、それまではある程度系統(タイプ)は固定しといたほうがいいのだ、と」
「確かにな。どちらにも対応できるというのは便利だけど、中途半端になりすぎて帰って戦闘では役に立てないことが多い。だからタイプは固定したほうがいいとは言うな。でも、セシルは問題ないんじゃねぇの？今までの戦闘もほとんど前衛でこなしているし」
近くでノエルちゃんと特訓をしていたウェスリーが首を挟んでき

た。
「そうだね。私はまだまだ至らない部分が多いけどセシル君が前でカバーしてくれるから」
言いながらノエルちゃんは箒を空にかざして火球（ファイアーボール）を打ち出した。
確かに今までの僕はどちらかといえば主に前衛の戦闘スタイルを取ってきた。魔法は基本的に広範囲に広げて敵を一網打尽にしたり足止めしたりするために使う程度だ。
それ以外では基本的に戦闘の授業で磨き上げられた剣を使っている。
「……」

「隙あり、セシル！！」

「え、うわぁ！？」
ギルバートの銃弾がぼんやり考え込んでいた僕の左腕に当たった。
「セシル君、大丈夫！？」
ノエルちゃんがウェスリーとの特訓を中断し、僕のところに慌てて駆けつけてくれた。
「ノエル、ちゃんと練習弾を使っているから心配ない。ただ、軽く痺れる程度だ」
ギルバートが僕の左腕には何の別状もないことを告げる。ノエルちゃんはホッとした表情になり、一応ということで回復魔法をかけてくれた。
「先ほどからずっと動きが鈍かった。戦場では間違いなくかっこうのターゲットになるぞ」
ギルバートが僕と視線を合わせるようにしゃがんで言った。
「先ほど我輩が言ったことを考えていたのか？」
「え？まぁ、ちょっと……ね」
「はぁぁ。お前ってほんとに真面目な奴だなぁ」
ウェスリーが大袈裟にため息をつく。

「だって、今までそんなこと気にしたことなかったものだから、そうやって考えてみると僕はどっちなんだろうって……」
僕は痛みのなくなった左腕を軽く動かしてからノエルちゃんに礼を告げた。
「敵の正体も見えかけてきて、いよいよ本番というときに前衛か後衛かで僕が中途半端な位置にいたら皆に迷惑をかけてしまうことになる」
「そんなこと……」
ないよ、とノエルちゃんは言いかけてやめた。彼女は優しいから本当は言おうとしたのだろうな。
「だったら試してみたらいいんじゃないか？」

闘技場の出入り口から聞こえた声に僕ら四人は顔を上げた。
「アキトさん」
闘技場の出入り口にはアキトさんと、ラウナちゃん、他の二人は名前は知らないけど確か生徒会の人達だ。
「高等魔術士の生徒は帰省中じゃなかったのか？」
ウェスリーの言葉にアキトさんは首を横に振った。
「こんな時に生徒会がいなくて誰がこの学校を動かすんだ？」
「私達は自分達の意思でここに残りました。もやもやしたままで故郷へ帰れません」
「しかし、ここへ来たのは…？」
「俺らも君達と同じだったんだよ」
ボサボサにはねまくった赤髪の男性が言った。
「敵の強さは聞いているわ。生徒会長がアキト君に毎日回復魔法をかけなければならないくらいの高い魔力と魔法を持っているって」
「だから、こうして俺達も自分達の力量を見直すためにこうしてきたんだ。そしたらお前らがいた」
赤髪の男性が面白くなさそうに言った。

「お前らの話はいろいろ聞いているぜ。俺達生徒会の面子を丸つぶしにしてくれたパーティだ」
「丸つぶしだなんて…。だいたい、こんな時に面子もくそもないでしょう？」
「いいや、大アリだ！」
赤髪の男性の声がヒートアップして大きくなった。
「お前達この学校の生徒の治安は俺達生徒会が守ると決まっているんだ。それが、事件が起こってからは全階級で戦闘の授業が強化され、俺達生徒会の出る幕がなくなってきている。これはいかなることか！」
『……』
「今までこの学校で行ってきた戦闘訓練というのは全て賢者になるためだけの、いわばステータスのためだけの授業と言ってよかったのに、それが今は学校を守るためになっているではないか！」
「いや、事態が事態なんだからそれでいいだろうよ」
ウェスリーの言葉に赤髪の男性は「否！」と強く否定する。
なんだかここまでくるとただ単に僕達に対する八つ当たりじゃないような気がする。ついでにいうとこの人、ぶっちゃけた話を出しすぎだよ。確かに戦闘の授業はそういう風に取られがちだけど、騎士団の魔術師部隊に入るのを夢見て真面目にやっている人もいるんだからそれは聞き捨てならない。魔術士に戦闘訓練がいらないなんてことはないんだ。
僕がそのことを赤髪の男性にそのことを言うと、彼は少し言葉に詰まってしまった。
「つまりだれだ、結局のとこアンタは面子や階級ってものに縛られすぎなんだよ。生徒会は正義のヒーロー的な部分はあるかもしれないけど、正義のヒーローじゃないんだよ」
「なんと！いつも面倒くさがりのウェスリーが真面目なことを…！？」
「時と場合によるっての。このムサイの説得するにはそれが一番で

しょーよ？」
「む、ムサイだとぉ…！？」
「ウェ、ウェスリーさん、言いすぎですよ！」
状況が悪化したのを察したのかノエルちゃんがウェスリーに注意をする。
「もう我慢ならん。お前達の今までの手柄が本当のものだったのかどうか我が生徒会メンバーが試してやる！！皆、いいな！」
「は、はい！」
「まったくもう…」
ラウナちゃんは少々面食らったように、もう一人の金髪の女性は仕方なさそうにその綺麗にウェーブした髪を触った。
「アキトさん、これは止めたほうが……」
「いいんじゃないか？ウェスリーはうまく俺達に戦闘させやすい空間を作ってくれたよ。そのほうが全力でやれていい」
「はぁ…」
「セシル、さっき僕が言ったこと忘れるなよ。君がどっちにふさわしいか、自分自身で決めるんだ」
「はい！」
僕はアキトさんにしっかり頷いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5732d/

本格派魔法学園！！ファトシュレーン～ぱーと３～

2010年10月18日13時32分発行